しが国際協力親善大使レポート

有本（ありもと）　つる代（よ）さん

隊次：２０１５年度４次隊
職種：服飾
派遣国：ザンビア

自己紹介

　滋賀県湖南市から草津市内に嫁ぎ４０年間暮らす。若い頃から青年海外協力隊には興味があり、いつかは参加したいという夢を持ちながら暮らしていました。
仕事（自営業）を終え自分の時間が持てるようになったので、NPO リボーン・京都　（古い着物を再利用して、発展途上国の女性自立支援のための洋裁技術指導をする）でボランテイア活動をはじめました。ここでラオス、ヨルダンに派遣され洋裁指導を経験しました。この経験を活かしたいとシニア海外ボランティアに応募し今回のザンビア派遣が決まりました。まさに「Dreams come true」です。２年間の派遣に気持ちよく送り出してくれた家族に感謝しています。

ザンビアの紹介

　ザンビアは、アフリカ南部にある内陸国で周りを８か国（アンゴラ、コンゴ、タンザニア、マラウイ、モザンビーク、ジンバブエ、ナミビア、ボツワナ）に囲まれています。気候は乾季・雨季に分かれ今１２月は雨期で雨が多いですが、日本の梅雨のようではなく１日に何時間か降って晴れるということが多いです。朝晩は肌寒く日中はＴシャツ１枚でも暑いくらいです。アフリカというとあまり緑がなく乾燥したイメージがありますが、ザンビアは高地のためか、緑が多く、木々もものすごく大きく伸び、枝を大きく広げ心地よい木陰を作ってくれています。どんな暑い時でも、木陰にはいると涼しい風が吹いてきて何ともいえない幸せな気分になります。ザンビア人は明るく、おしゃべりが大好きでよくジョークをとばして大笑いしています。誰でも道で出会うと”マダム　元気か？“と声をかけてくれます。近年日本人が忘れてしまった何か大切なものがここにはあるように思えます。

生活、活動について

　私の配属先はザンビアの首都ルサカにあるルサカビジネス＆テクニカルカレッジ、(LBTC) と言い、高等教育省管轄の国立職業訓練校です。学校はビジネス、エンジニアリング，ホスピタリティの３部門があり、私はホスピタリティ部のテーラリングコースで　服飾全般を教えています。生徒は約２０人で全国から集まって来ているので (構内に５棟の寮があります)、教室内はニャンジャ語、ベンバ語、トンガ語などが飛び交っています。公用語は英語なので授業は英語ですが、なかなかうまく伝わらないと、関西弁が出てきてしまい、生徒にキョトンとされています。
　教室の機材は、足ふみ式ミシン５台、工業用ミシン５台、ロックミシン（縁かがり用ミシン）１台がありますが、よく故障するので思うように授業が進みません。停電もよくあり、雨がふる

と　雨漏りがし、慌ててミシンや机を移動させています。教室の屋根はスレート板１枚なので日中は教室内がものすごく暑くなりミシンや机までが、熱くなってきます。そんな中でも皆汗だくで頑張っています。洋裁道具なども日本に比べ品質が悪く日本には普通にあるのにザンビアにはないものが多いです。ハサミは切れない、針は針先がとがってなくて布に刺さらない、鉛筆は書けない、など不便というかイライラすることが多いです。日本の何もかも便利な中で当たり前に暮らしていると有難いという事になかなか気が付かないものです。

　ザンビアの洋裁技術はまだまだ低いので教えたいことや伝えたい事はたくさんあります。生徒たちも“なんでも教えてほしい”という気持ちを持っているので、次々と質問してきます。私もそれに少しでも応えたいと思い、サンプルを作ったりしながら　どうすればうまく伝えられるか考えながら過ごしています。洋裁技術が上がれば、卒業後彼らが仕事をしていくうえでの収入アップに繋がり、全てのもののクオリティーアップに繋がるものと考えています。生徒達は皆可愛くてマダム、マダムと言って色々話してくれます。

　生活面では　家から学校までミニバス（日本のハイエースに１６人くらい乗ります）で通っています。これがまた楽しい。お客さんが少ないと動かない。お客さんを求めていろんな道を走る。何でも乗せる。（鶏２羽手掴みで持って乗ってきた人や、大きな袋にいっぱい野菜やイモも詰め込んで乗ってくる人など）バスは古いので窓ガラスが割れてビニールが張り付けてあるのや、ハンドルのクラクションの部分がそっくりなくなっているのや、ドアが途中で外れてしまうものや、椅子は壊れてボロボロ、椅子の代わりにブロックや丸太がおいてあったりで、飽きません。日本の車をここまで　使ってもらえ「日本車はすばらしい、good!」と言ってもらうとうれしいです。物というのはなんでもこの様に大事に使い切ってこそ、物に対する感謝の気持ちが湧くものだと思います。

　JICA の仲間や日本の友達、家族に助けられながら後半も元気でザンビアで仕事を続けて行きたいと思っています。

配属先での授業の様子１

配属先での授業の様子２

しが国際協力親善大使レポート

有本（ありもと）　つる代（よ）さん

隊次：２０１５年度４次隊
職種：服飾
派遣国：ザンビア

自己紹介

　滋賀で生まれ　滋賀で育ちました。６０歳を前に　自営業を終え、子供達も独立したのを機に、若い頃からの夢であったＪＩＣＡで仕事がしたいと応募しました。洋裁は若いころから続けておりましたので、ＮＰＯでボランテイアとして　途上国（ヨルダン、ラオス）で教えた経験を活かせたらと考えました。

国、文化、気候の紹介

　派遣先は、アフリカ大陸の内部に位置する、ザンビアという国です。首都はルサカです。昔は北ローデシアと呼ばれイギリスの植民地でした。鉱物資源が多く特に銅が多く採れます。内陸国ですので海には面していませんが、湖がたくさんあるので、びわ湖のように淡水魚が捕れます。主にびわ湖で獲れる鯉やフナのような魚（ンソンバと呼ばれています）が良く売られています。唐揚げにして主食であるシマ（トウモロコシを粉にしてお湯をいれてよく捏ねたもの）といっしょに食べます。他に子魚も捕れて日干しにした　出しジャコ（カペンターと呼ばれています）の様なものもたくさん売られています。気候は雨期と乾期に分かれ今１２月は雨期です。雨の後あたり一面水浸しで道が無くなってしまうこともあります。特に田舎はひどい状態になるそうです。そんな時は引き返すしかありません。

　宗教はキリスト教が大多数で彼らの生活の中に深く根付いているのを感じます。教会に行くことが　彼らの楽しみの一つの様で、皆ここぞとばかりにおしゃれをしていきます。ザンビア人に“マダムはなぜ教会に行かないの？”とよく聞かれます。“私は仏教徒だから”と答えると“仏教徒の教会はどこにあるの？”や、“仏教徒はどこでお祈りするの？”などと色々聞かれます。教会音楽がたくさんあり、生徒達は上手に教室内でよく歌っています。

活動と生活

　活動はルサカ市内にある国立職業訓練校で　洋裁全般を教えています。生徒は１８歳ぐらいから４０歳ぐらいの生徒２０人ほどです。赴任当時の彼らのスキルはひどいものでしたが、１年半を過ぎると全体にスキルがアップし、中には驚くほど上手になった生徒もいてうれしく思っています。ザンビア人は男性、女性共に大変おしゃれです。髪型はかつらや付け毛などで毎日変えてきます。アフリカの伝統的な布（チテンゲと呼ばれカラフルな色と大胆な柄が多い）を使った洋服が大好きです。チタンバーナーと呼ばれるチテンゲを頭に巻き付けるおしゃれもよくみかけます。私もここでは巻き付けています。

洋服のデザインは派手派手のこれでもかというようなものが好きで日本人なら引いてしまいそうなものですが、彼らにはよく似合うのです。生徒達はいかに他の人が　着ていないデザインの洋服をつくるかに苦心しています。学校で始めての取り組みとしてフアッションショーを開催しました。

生徒が作った作品を、モデルとして選ばれた生徒が着て発表するのです。ザンビア人は賑やかな事が大好きで、ショーの間中観客からは　口笛や拍手でやんやの喝采です。モデルの生徒も大いに気をよくして　ノリノリでした。そのうち音楽に合わせて　皆が踊りだすのです。ザンビア人たちはうれしい時　幸せな時はすぐに歌を歌いながら踊りだします。そばで見ていて楽しいです。

他の活動としてルサカから車で２時～３時間ぐらい東にいったところにある　電気も水道もない　ルフンサという村へ５日間　洋裁指導に行ってきました。若い隊員がここで仕事をしています。各村の女性グループの代表（２０人位）に集まってもらい手縫い（もちろんミシンはありません）でできる小物（財布、ポーチスクールバック、子供ズボン、子供スカートなど）を教えました。アイロンは炭火を使ったアイロンで　日本では５～６０年前に使っていたようなアイロンです。

村は大変広くて　各村から集会所まで集まってくるのに遠い人は２時間かけて歩いて来てくれたのです。帰ってからは、夜は月明りの下で朝は夜明けとともにせっせと縫っていたそうです。ものすごく簡単な事でも彼らは教えてもらったことがない（ほとんど学校に行っていない、行けなかった人達です）ので　なんでも教えて欲しいという気持ちが強く伝わってきました。代表の彼らが各村に戻り他の女性たちに自分が習ったことを教え、うまくできる人はそれを売って　現金収入とするのです。

生活面ですが、首都に住んでいますので　電気、水道のある暮らしをしていますが、よく停電（計画停電）します。同じ市内でも電気　水道のない地域もたくさんあります。すぐ隣の家には電気があるのに、自分の家にはないという所もよく見かけます。水道のない所では　家族総出で手に手にバケツやペットボトルを持って、水をもらいにいくのです。これは子供達の大切な仕事なのです。電気、水道があって当たり前の日本に住んでいると　その有難さに気がつかないものです。ここに住んでほんとうに電気、水道があるって　有難いことなんだなあと　強く思います。日本人が思っている以上に海外では、”日本はすばらしい、日本の製品はすばらしい、日本人は正直で勤勉だ“と言われます。私たちは　日本人としてもっと　自信と誇りを持ちたいものです。ザンビアの自然と人々（イライラもさせられますが）や、ＪＩＣＡの仲間に助けられ２年間ここで過ごせた事はほんとうに有難いことです。この経験を他の人達にも味わってほしいし、それがこれからの人生に大いに活かされる事と確信します。

ファッションショー

ルフンサ女性グループ　裁縫教室

完成したドレスを着て、喜びを踊りで表現する女性達